若葉合

へ
1.873

1873

下つ世稲瀬へ詣つ例月にあし毎
落葉の歌に笠を掛ひあけ松のし
鳥羽小廊のをはりに霞を脱て
心しのれせし千山ハこゝろよく
時あるあまと霄なり漏るゝ節
此のほとりまてもつゝうひ通て
されなり三十日のみそせし気色と
あそ忘きゆる彼先達とかい
まゐつる何ハ万象の根よ
みやこし家のしてそへ所もし紙

1873

新ばなしは故あり巻首攬志に成
て予は巻尾を汚されけり半
はむしといへる博士ちなみに
とらぬかれし風流をかたより
ついて鳥猿の戯りを合楽せるは
なかし山のたゑの盛なる心をとかし
て更幾の二字を以て稲荷
の山のあそびかりしを座あるなる
平造営ありて神と人とのゆえ
をえつと仰られさる納え

入日のころとくさすげに都なりせん
智恩院の山門に空樹乃おちを
情まどふ優なる人のうるはしく
又は然とよぶものしたまと思ひける
枝よりかえてみひらる魚まつつき
のかとは志らきと無心なる心をとう
こうしていと興ありて豆腐を
人は猿もの涙まして寂然の枯床
紀ははそれぬかれて鞍上ノ
吟よくぞ深味の古意を追て

一句の奔跳ありて底をいふ
各心ハおもしろく半藪のさむさを
いとひ無数房合して思せまし各
工案乃力を合せそくり此集に序
りきてなかし国をそえん
つるそハあらまほしき事と心得てし已
まそしれるおそりて猶のこまかに
信を犯されんことを判読せる
のみ心微意于茲述　晋其角
元禄九丙子稔五月仲旬

ウ

若紫集第一　岩翁

白魚も若紫も泥や泊瀬川
乃子か家序のよいる　起外
独えむ九尺の秋に身ぬまげて
去獲の脈めしさむか月新
普請場し作挿えてし唐ら
呼ふ紙あらすこるの鼻緒
田村しうちひゞきて蔚くと
又はかゞか家ゝ千日科し　札

糀屋の續く新町に松見える
机重ねし身乃定けなる肩
情なく寒吹得け承雪の上
せをてしる抱病哀死子うし
惛(ムツト)氣よ後捷へ下氣霄月の夢
居しさうせし二切し紙鋏
にくせの壁喰ちて隣　君なるも
襖(テキリ)調ほけく荷紙志ある親
此(ナミ)涙鋏もあろうと堂乃法
柳ならけく無う松を橋

名
入洞り乱掛紙お表紙わり
手し黒(ソハ)髄(カス)の皺(シハ)む　石切
宗麺紙うへくえせそあの男
乎家人のこそまれ　追分
蜻(トンハウ)も鵯の艸莖うしかまへく
負ても高つけし表盛も川名
老の月笑ふも日すし　紋裁
むさ又橋露しむさ又　默札
村雨し精(イカ)得し高成就院
浴(ユカ)衣(タ)紙りりく急家さみれ

ウ

以三日朝まりけ地　誹ん
河豚のあるを為仮待ッ
鯆（ハラハヒ）いり小菊の手代川猿ひ
宴乃紅めり柔し大工のこ出ム
日一盃傘いり地為墨て
茶碗為虎　娘春の壊（カイ）
孫ら水恭し珠佳適へて就漆
世月の為しうはる云の為

賛二　介我

若葉より蔦をこし猿の声
麻の人あって雨ちる脇笠
川中すり虚舟軽く揺向る
催し忽ちそる地　樋（ヘキ）塵
高い椽ぞ川を上りて葛の床
尖川に花乃ら淡ぞ　雛頭
ざゞる破し兜巾小鳥ぞ
馬洗殺きし　杜紙義紙

ウ

五

嫁の懸しさに道の切汐
三十横様敷より脱旅
結しの橋乃かけたる肩を私
海にうつりたる風乃音
はくるゝ萬寿高座の月
販指帯の蔗　さまの撰
湯泉と立ならぶ家の風
砚箱とましたる文六年の禄宜
花眼鏡なし川乃橋山
巌掃りしや茂に庫の角

名

子の傍のめくら義がめくらの表乃雨
芭の墓にて捨物乃出
厩をえさ老翁のまぎるゝや
同談令し　主従乃鼻
風呂敷の振に出どし　厩襷
鐶をあてたる　伴縁の溪棲
亂つゝ結祖母達病して
小網やほしけ文雪乃鶯
業家て明衣はんて他の屏風
使なきしけしますなれ

ウ

ゆくゆくも二本なり年二歳
鶉合をし逢ほとの翁ノ
伊篇の縁さかや背を出み指
鰹しく海をし標書乃郷
又しくも帰れんすと蔦の蔓
眉千門さは心なりけ雪
かゝりと見へく恋一本まく花螢
蝶しくもの影くあらつも八間

ウ

尺艸

求之

萬葉也奥まうくなる稲荷山
青い狗觧もて蔓若乃花
鉛鑑烏しく灰の乾く疏ん
牛きく疏より鞍乃さいされ
二勝代狗つく眠る旅の月
簀子の磋揃もて書きます
巡寮子蘇や席や押らく
破籠乃けの揮箱漏ル

田井ノ瀬の渡しわたりて郡山
あり姫宮より百姓乃墓
死ゆく見合のうへそ家也
鏡ま祥居し十遍の瀧
麻て居ゆも酒ハ呑ませまつく フナムシ
ニ居段ハ河の家家鯏
烏帽子あく浄瑠璃は花の庄
弥命をとも一の藤を舞
なる給地下の知りてそ志ゐ
臨といそけと雛子を投出す

伴治とハ春風定まる堤や
編笠忘れもの乃外聞
ものちくも蚕を撚りて起ると
蝶一節見て績文信とも
上方の古まく来りまて貢米乃わり
なれは茶の庭に踊る絵わり盆
来りて鶴居る桐標ぞ
高奴仲よし雪の方乃庄
足尾山櫻の中は柿の鳥
渥掛がふしさうか川をき出ス

ウ

子より孫に曽孫 玄孫 衣配て
去乃華したのます 上ハ望
月花鳥九散り鯉乙菓の邑
傾く度し 手乃 文好み
楽ちらし 竟く 味御 捌
膝四升入出汁 繕盤る竃
至る許 なのあたりに薫ふるり
押 山頂 莟まと 人体

ウ

第四　　　　　　　　　　堤亭

立てや 没(イリ)日の影なふる 駐(トメ)
細根るり 流し 吐水
何條ぞるゑ 紅小ささ 丈 男めく
今朝出し まし ゝ 借を頭す
算し 龍をむら 飛 蔦 床来
そこでしまく お刹 鯖の塩(サカムカヒ)
露霜や 止メてゝめらむ 酊
いく浮み たるとされぬ あるに

勝まそ正直坊乃哀さよ
鎖を吟くいぬる盗人
出かゝる雲ち雲揚乃離し山
ひ扱川くなける泉郎ア梯
あさきや庄牛らけく蛇乃手
見えそ出し春あり盆茶の陰
将りし羽織を右川を辻相撲
ざんざ降や月乃哀亦
菊の河月待てし氏の薑施乞り
箱アリのさまし傀儡もある

鴬小町し經文人遠さかり
子の隣ふきまし小深艸の町
一くし竿の形くしや花荊
所ぬふ方し文野顔いつ
出来ず下手な本屋八人
そ度の橋まて各別の橋
頻子の鈍撲を如せと恨しき
袖ち川りしや紋がりの完
船と今もみ見えし礙步(アルキ)
纔纔ですまし直ア石乞

名月や例の通りにさしかゝる
溝へ轂の走りぬ　秋風
一房もなくしぬ葡萄ふさ〳〵と
虫歯の薬ハさゝ能き手探
新焼瓦のけしき賤れと訶るゝ
風も志はらいし茶店乃縁
笹吹く花の盛すぎ遅く来る
すまし〳〵とおもふかゆる　白萬

対文　撰几

丁鯱の精なりしも葛なふふ
菓紙也しに文也月うら
さ以に二階の狂ひ志川まれて
押入の姫袖へさ様の蟬
縁掛を給仕に呼く旅乃秋
襟しつるゝ無事の首
薦摺生まれと貴ル菓此袋
食のすゝんで穀乃盛なる

縁も杉も波そよかる岸の稲田
萱網代寺より自由なる家寺
名のみ川に蟄かゞへて遊鯲あり
枕らそゝく枕外なりし文
春雨の射に射ゝ小えたる山の
糯米はすてし落る名はて
春流若紫遠山にあそびて遊ぶを
足見の上より寄せて金乃金
名のみ利根関宿の泊り船
ゝく地にかゝりし塩も浅漬

十

蜊て脛も悪り無 内 三里
養ゝし物か乃外
昭庵へたなる連ゝし蔦の花
引よし信の加ふる新茶売
夕月や深に雀乃躍る音
視斗しせし分 石菖
かくし千鐘は撹けて菓おり
馬の跳上乃うる 右物
張紙は價は高き書下の内
杉しもちゝ 竹 樋を 巻

ウ

十段の綺羅を掛てどよむ也
なをも新タなりし宮乃泪文
照ッまる不知の月に入風なりく
出觴さすまでしも笑人　雉
被衣カツキ被りいさ飛細ナリんとするかめ
人しられ　言モノイヒして　伊勢
手入まず桔梗自慢乃花盛
晴れゆく　芸情をしたかる

ウ

宵六　　未陌

榛ハンの木乃目に宵まで荻葉ぞ
鮎さへの川まりに瀬く石垢
枠に巻きし紙に物うく
七つさの手乃さはるたる市
名月や雨に似てる男一生
人は荻なん金柑乃枝
月深ハンキし芝の徹し行鶉
要もらぬしるる身寄屋の帳

此らく吾ふまゆとしてれの塵
書の病去り　寿乃ゆゑ
時乃ならい夢中に笑ふ果敢なさ
京将自由ならず花紙作り
堪ふるの辞ろしも勝のなぐさみ
かんな屑しも茶筌あれは
ちりんほりと縫合乃堺の宮ろ屛
前は笑うしひとり居宿
花作り桐手の紗はさつと引
軽い鈴は浮しる　座輪

十

多く慶濃珍わり乃判經
瑕もて揺りあつて情を剃力
鼓屋乃便よの鮑見と高ゆえ
つまると寿しと天神の紺の尾
宗朝の様にて如何動しく
罪を菓小集家　園寺乃雪
かくほとすねしいそうと扇の宮お
純りとも二棟ともて猶しく信公
三麻に衛もり於待しく熟り私
寸白勝乃類の熟しさ

ウ

古侘葉蕗のすゝかれあひ
夕紅葉し菫の繍し酔つ
嫁も濁水ぬるし綴のえ
これるものとて有箱の擲ん
大石の積み逢ひし庭の花
三日の桃しく物ゆれ枝
杉段より笛とをしれ蜆殻
去の川出し見中れ家駒

其七　常陽

人ちなの合豆腐の家ちなへ
家陰の闕盞雲のいよ出し枝
老猿乃石塀と年のたよ朱く
梓の雲の立つれ船出
桐油の刈り八車し茎月
そこの藁ぶし鴨乃
ウ
秋乃蟋蟀出てそぶ一かんそて
女の納ふりしかるよ　なまそ

いさゝかに梅うくさゝく霧笑
新池の馳走として鐘なり
奥深く知らしこかする禪堂
竈ともる家の裏に御す店名
暇ゝに名所まで〳〵照返し居
枯そむりしと古さらく紙縄
血の気をひきし出す池の底
根乃山川そもそも櫂跡に
浮かこくと花切りたる鶴の姿
さかる柳し雨乃ぼろ〳〵

蛙あはせまに色ヶ関也涅津雛（トリ）
啼しにしらぬ六法分猶
志かも欄乃櫂（カイ）盤ろ〳〵萩蓬
一（イツ）極にかゝる破家の浜の夕住
出の都ヶ橋の浅籠にたらこむ
幣ぶりたそく真鼻な新有り
龍伏に卯の刻雨の一滴して
棲みかまとはし園（エン）頭（ナウ）にす
小舟中の懐紙かく一夜清宿
病く〳〵し松本に抜く亀

ウ

さむしろに耳洞こそ拂へし
絲つかれ續しやうの柳系
色このる鐵隊にあかりつゝ
あかれ仇名乃念の債まで
ちらさる目に飛んゝる池の鶴
あひそめしに洪さし遅るゝ
乱離指人散乃軽んこ
徐は渦もましあ下し

ウ

才八

廣谷

ゆかしき菊花を擔う難のと
まり白雨乃遠ひ雷
身をも行人能料して引きりく
こゝ敷さんにあれ御手判さる
大きさの出旋すりつ尾の月
下りし家の葉を出しも
ことあまた流さり知れ紀れし
數知りてつし君に紛せしや

晴ちてゐる所の杉紙尺をと
青柳りと土器ノ味噌
竹ヶ岳ら羽織の裾紙をかゝに
蓁の机云ヶ皆(ミンナ)　古
白尾編子ころをす蔦八大酉氏
槿八きゝ咲筆持寺乃頗
六尺紙龍灯借り小菅の拝
法りゝ後世すて愈うる　行
牡丹皆寂發へよとし庭の花
引出す牛のこゝづむ　春草

水きさる蕉泥むう之い川
一文百でし常燈乃施主
目の中乃よさい、画ある乳母ヶ姪
引きみ川くも乳うなれ舞
便ハ種又ふそりそゐ病を
でづち二人くいうむ鞭歩
祥瑞(シヨンズイ)もし火入の庭紙かりる
西行桜ことふ　位を紀
籠り雛の節合の岡色なる
春ること・かいりし　松乃　勝

ウ

あさの山すそ虎けさの序
千年を見知て移す神酒
花ての酒盛の肴の芳根
たくらずまする餅の賑
飼壇のさのみとうりれいけ
あさしよ思ふやあるる鮮え
此場の鮮やかに数乃花
筆乃稽古の初く二年

ウ

才九

専吟

先ず屋の目のやうな菓子ならず
巣立乃鳥親しあまつる
皆人のかずけいて絵書きて筆まちて
温（アツ）え東会経る月雪
ほよする須る採識のむらずれ
橋をと纔でもざ川をも
大根なるの葉をまうの流れらく
展のやる子の紙菱の葉に握ぐ

庭に一物ありて眼をおどろかす
麻芯の帯を井手の下帯
大塊にとりつきける蝸
碎とらへて石中乃瀧
珠つなぎつなげるの苑夕蛇
地錦を浮へ盆乃手を巻き
枯もちや地の宮居を撞木町
ひろい池をしき起して物知り庵
此所ゆへ其八雛なり花の奥
独活乃池の瀧なりけりて

けふをはの大幟なる東福寺
そこね炬燵なる持ちる宰人
葬礼をうつけるゝ標ぬるく
御まくはげ燦雅にか雨
衆門も思ひもよらぬ身気ぬく
市女も賤の色の香のまとまど
江戸とその便をれ又小竹の
専ら世を花としかまへ
一足の馬を立てゝ表具屋
之がけ八角たしかなる宗門

ウ

出鉄も酔しても年の瀧月

芸能傍ほのるまうく挑灯つむ

霽くともまつもの南存の外

衣乃下きし鬼角白むく

大勝しあつくも去ぬるも酒り也

頻催しく　細子　大人

民雲子なかご乗紙稀てらむや

あら候ひ蘭しるに　豊きて

ウ

第十　其角

年寒し為なるの雲丸　霧朝

牡丹も蜀あいつしかの雨

げだくしてあかとも去るも辰あ鈎て

ぶぶとも一ッ八章ほえんれ粟

舟花乃菊紙云出て篇の月

ひと人路中紙に拭の繕

秋の秋後春千鈴か中へしおる

遊ぶ乃。蓮まかり三味線抽ひく

廿

拙なれハ発句ハ切字なし
あすも元日と指す数ゑ子
窄人と醫者ばかりさむき桐油
初午は悋気競られし返
さかしさみつけつつあるに絹
月は挫し明す　頼貞
躍らせし六間の障子押へ待
鶉の啼り酔さ月の伴
花ふらし魚荘の気あり書子
歯扱き又見るもの文のしつえ

十

干潟に撹攪の漏て去の風
家中の乳母乃無言帰りで
首引のことろふ揺子て記あるで
ぬきんでし氏が薮しなみ味
病と猫ひよろひしく流しかま
雨戸押されて豆廣押せる
桐壺の春深くわりまあかれ
襟押しやすみ浄斎の章鞨
射もころし切もとるよ鎖物
維も破れもち宵うし勝

待得や〇まては白川なる早（これ）
忘もやすり乃扇悲しき
岐一岐二たえ氣を一花鶴
實長おう皆もしもの
十〇ぞ居嗜も〇の牛の扇
遠かり画（カイ）より章崎の人
降く手花の名おを消換
好（スイ）き長物なりありる去

延寶 二十歌仙ハ芭蕉の翁が
岩翁士ハ出りも其出より元禄の
今まて昼夜を捨て俳諧楽隠居
出会しのあ翁友を雇ふ若葉の
十哥仙となせり厳に例の其角
くりより廊坊其苗と出雲
人これ玄々ハ句々の妙々を實（じり）

穐又也し月乃ちうく歳
棠尺んわ多ゆ紫心
武江の白鶴ちく向川て書

山人

吉田魚川